

# 『今昔物語集』

## 卷三十一の異境（郷）関連話

### （第十一～十八話）にみる想像性とその限界

高橋 貢

はじめに

本論文の要旨を始めに述べると、次の通りである。

『今昔物語集』（以下『今昔』と略称）卷三十一第十一話から十八話にかけての、一連の異境（郷）関連話をみると、若くて豪胆な人々が異境に出掛けるが、年配の人や分別のある人々は賛同しない。『今昔』作者も賛同しない人々と同じ立場にある。『今昔』は卷三十一に仏、あるいは公の世界から遠い世界の話を集めようとしながら、結局は両者の世界に戻り、両者の世界から離れることはできなかった。そこに作品としての『今昔』、及び『今昔』作者の限界を感じる。

以下、各話を分析検討することによって、この問題について述べて行く。

#### 一、各話の粗筋

卷三十一の第十一話から十八話にかけての一連の異境関連話をみると、それらを特色づける共通の要素をとり出すことができる。そのためにそれらの要素が各話のどこにあるのかを指摘する必要があるので、始めに各話の粗筋を左に載せることにする。

第十一話「陸奥国安倍頼時、行胡国空返語」(新日本古典文学大系による。以下同)——公の責めから逃れるために、安倍頼時一族が海の北にある未知の土地に渡る。土地は広大で、大河をさかのぼるが、行き着かない。地響きがあるので恐ろしく思い、葦原に船を隠すと、千騎ほどの馬に乗る人達が現われる。その人達は頭に着ける物が違い、ことばが分らない。頼時一行は関わらないようにと、本国に戻った(『宇治拾遺物語』に同話はあるが、大きな相違はない)。

十二話「鎮西人、至度羅羅島語」——鎮西の人々が南西方面の沖にある未知の島に着く。大勢の人が地を響かせて来るので、鬼ではないかと思う。その人達は烏帽子をかぶった男達であった。鎮西の人々は恐れて島から離れ、鎮西に戻る。老人は、その島は度羅羅の島で、人を食とする島だと言う。人々はあさましく思い、ますます恐れる。

十三話「通大峰僧、行酒泉郷語」——仏道修行僧が大峰で道に迷い、人郷に出た。その土地は実は酒泉郷である。大きな家の主人から若い男に、例の所に連れて行けと命じると、恐ろしく思うが、逃げる方法がない。若い男は、実はこの郷を他の人に知られるのが恐ろしいので殺すのだ、という。修行僧は他言しないことを誓って許してもらい、本の郷に戻る。本の郷に戻って、人々に酒泉郷の話をする、若者達は「鬼や神がいるなら恐ろしいが、人ならば恐れることはない」と言って、老人達が止めるのも聞き入れず出掛ける。しかし二度と戻ることにはなかった。

十四話「通四国辺地僧、行不知所被打成馬語」——三人の修行僧が四国の辺地をまわっているうちに山に迷いこむ。一軒の家があつて、恐ろしそうな六十歳ほどの僧が住んでいる。鬼や神でも止むを得ないと思つて、三人は室内に入ると、二人はむちで打たれて馬にされる。残る一人は逃げて、二人の女に助けられる。翌朝、女に道を教えてもらい、人里に出る。女は修行僧に、その所を言うなど口止めするが、修行僧は人々に言いふらす。若者達がその場所を探すが、分らなかつた。話の語り手は、この「此ノ世ニハ非又所」を畜生道の場合ではないかとし、知らぬ所に行

つてはいけない、と評する。

十五話「北山狗、人為妻語」——都の男が夜、北山で道に迷い、若い女の家に宿す。女は、間もなく奇異しい物が来ると告げる。男は、鬼ではないかと、恐ろしく思う。奇異しい物は大きい白犬であった。女は他言しないように男に言うが、男は都に戻って、人々に告げた。若者達がそのことを聞いて、その家に押し掛けて行くと、犬は女を連れて山に入ってしまう。男は間もなく死ぬ。古老は、犬は神ではないかと評する。

十六話「佐渡国人、為風被吹寄不知島語」——佐渡の国の人々が海で激しい南風に吹かれ、北の島に流される。島の人は頭にかぶる物が異様で、背丈が高く、此の世の人と思われず、恐ろしい。鬼で、殺されるのではないかと思う。ところが大きな不動、芋頭という食べ物を出してくれるので、鬼ではなく神であろうと疑う。佐渡に戻ってこのことを話すと、聞く人々も恐れる。

十七話「常陸国□郡寄死人語」——藤原信通が常陸の守の時、海岸に身長が五丈ほどの人の死体が打ち寄せられたので、人々は奇異しがりあう。また陸奥国の海岸にも巨大な死人が打ち寄せられる。知識のある僧は、この一世界にこのような巨大な人がいるということを仏は説いていない。阿修羅の女かと言う。人々がいろいろ言い立てるが、兵が矢を射ると、矢は深く突きささるので、人々は感心する。しばらくして死体がくさると、くさいのに堪え難く思う人々は逃げ去る。

十八話「越後国被打寄小船語」——源行任が越後の守の時、海岸に小船が打ち寄せられたので、人々は奇異しがる。年配の人は、以前にもこのようなことがあった、と言う。体の小さい人がここより北にある世界から来たのではないだろうか。

二、各話に含まれる共通要素の検討

次に右の各話に、二話以上に含まれる共通する要素があるが、それらの共通要素を抽出すると、左のようになる。

- 1、異境の土地をあらわす表現——「此ノ奥ノ方ヨリ、海ノ北ニ幽ニ被見渡ル地」「胡国」(十一話)、「鎮西ノ未申ノ方ニ当テ、遙ノ息ニ大キナル鳥有リ」「不知又所」「度羅ノ島」(十二話)、「何クトモ不思エ又谷ノ方様(の先にある)大ナル人郷」(十三話)、「人跡絶タル深キ谷(の先にある)一ノ平地」「此ノ世ニハ非又所」「不知又山中」(十四話)、「谷ノ迫ニ、小キ庵」(十五話)、「息ノ方(にある)一ノ島」「鬼ノ住ケル島」(十六話)、「此ヨリ北ニ有ル世界」(十八話)

- 2、頭にかぶる物は、こちらの国や土地の人々のかぶる烏帽子ではなく、異様な物——十一・十六話
- 3、体が大きい、あるいは小さい——十五・十六・十七・十八話
- 4、周囲の状況が異様——十一(土地が広大)・十三(泉から酒がわき出る)・十六話(大きな不動や芋頭ができる)

- 5、恐怖を感じる——十一・十二・十三・十四・十五・十六話
- 6、異境の人や動物を鬼神にたとえる——十二・十三・十四・十五・十六・十七話
- 7、こちらの人からみると、異境の人達は、人を殺したり、食べると思う——十二・十三・十四話
- 8、異境の人に、異境の土地のことを言わないようにと口止めされるが、本の里に戻ると言いふらす——十三・十四・十五話

- 9、異境の様子について聞いた若者が探索に出、または出ようとする——十三・十四・十五話
- 10、年配者や知識のある僧が異境は恐ろしい土地と言ひ、行くのをとどめる——十二・十三・十四・十五話

11、異境の土地に行った本人が本国、あるいは本の里に戻って、二度とその異境には行かない——十一・十二・十六話

12、9の若者や、11の本人以外の人々が、さらに異境の土地を探索し続けることはしない——十一・十二・十三・十四・十五・十六・十八話

13、話末の批評——「人ノ中ニモ弊キ者ノ、人ニ不以ズ弊キ物ナド食フ者ヲバ、度羅人トハ云也ケリ」（十二話）、  
「人ノ不信ニテ口早キ事ハ、努々可止シ。赤、譬ヒ僧口早クシテ語ルトモ、行ク者共糸愚カ也」（十三話）、  
「無下ニ不知ザラム所ニハ不可行ズ」（十四話）、  
「信無カラム者ハ、心カラ命ヲ亡ボス也ケリ」（十五話）、  
「此ル奇異キ事ナム有ケル」（十六話）

卷三十一の一連の異境関連話は、「本国」「此ノ国」（十一・十六話）、  
「本ノ郷」（十三話）、  
「此ノ一世界」（十七話）に住む人達（話の語り手や作者も含まれる）にとつては「不知ヌ所」（十二話）、  
「此ノ世ニハ非ヌ所」（十四話）、  
「他国」（十六話）であり、非日常の土地に関わる奇異しい、異様な出来事の話である。本国に住む人達にとつての異境は日常の生活とはかけ離れた土地であり、そこに住む人達も本国では慣れた習慣や風習とは異なった異様な風習のもとに生きる人達である。その人達は右の6・7にまとめたように、鬼神にたとえられたり、人を殺したり食べたりすると考えられた。それらの話や記述に『今昔』が書かれた時代の人々や、話を語り、書いた人の想像性をみるこ  
とができる。

この想像性は『今昔』卷三十一にみられるだけではない。『日本書紀』欽明天皇五年十二月条に、佐渡ヶ島の御名部に肅慎みよびの人が漂着した。島民は人ではなく、鬼と称し、近寄らなかつた、という。また新大系『今昔』卷三十一第十二（四六六ページ）注三によれば、海の彼方の島に鬼が棲息するという考えは、半井本『保元物語』巻下等に

みえる、と指摘する。これらのことから異境の人達を鬼とみることは、古代日本人一般についていえることであつた。

### 三、年配者と分別のある人々の言説

右で述べたように、鬼神（特に鬼）は人を害するものと信じ、恐怖の対象として考えられたが、特に年配の人や分別のある人、智りのある僧の言説にはこの傾向が強い（右の10）。話末の批評文から推定すると、『今昔』作者もその中の一人である（右の13）。それらの話に記す土地は作者にとつても恐怖の対象の土地であつて、「人ノ不信ニテ口早キ事ハ、努々可止シ」（十三話）、「無下ニ不知ザラム所ニハ不可行」（十四話）の話末語に記すように、年配者や賢き僧とともに、作者は未知の土地に近寄るのを止めようとする。一方、若く勇ましい人々はそれらの土地や住居を探索する（十三・十四・十五話）。しかし十三話では若者達は二度と本の郷に戻ることはなく「甲斐無シ」「行タル人、一人不残、ズ皆被殺ニケルニコソハ有ラメ」で話は終り、「行ク者共糸愚也」と批評する。十四話では若く兵の道に堪える人々が出掛けようとするが、「道ノ行方モ無カリケレバ、然テ止ニケリ」で、それ以上、その土地を探すことはない。十五話では若者達が北山の奥に入って白犬と女を見つけるが、さらに山の中に入ってしまふ。若者達は「此ハ只者ニモ非ヌモノ也ケリ」と言つて戻つてしまふ。三話とも異境の地をその後、二度と探索することはない。最終的には本の郷の人々は異境の土地に近寄るのを避けるだけで、その土地に積極的に入りこみ、切り開く勇氣と大膽さに欠ける。

ここで卷三十一以外の異境関連話を数話とり上げる。天竺部をみると、本の郷を離れて遠い山や谷に行く話がある。卷五に比較的多い。例えば卷五第一話「僧迦羅五百商人、共至羅利国語」（『宇治拾遺物語』第九十一に同話）

は、僧迦羅一行の船が遭難して南海の未知の世界に行く。羅刹鬼の難を逃れて本国に戻るが、後に大軍を引き連れて羅刹国に渡り、鬼を滅して僧迦羅国を建てる。他国を侵略し、平定するという善悪は別として、僧迦羅話の方が卷三十一の諸話に比べると、新天地に向かう大膽さと勇氣があり、ロマンとサスペンス、スリルに富む。

また天竺仏法部の中の卷三第三話「目連、為聞仏御音行他世界語」は、仏弟子の目連が神通力で無量無辺の世界を越えて、他の世界に行く話である。この話は他の世界でも仏の声から離れることがなかったというが、目連の行動にも他の世界に出て行こうとする大膽さがある。

本朝仏法部の卷三十一第十一話「慈覚大師、巨宋伝頭密法帰来語」、第十二話「智証大師、巨宋伝頭蜜法帰来語」は、慈覚・智証の両大師が仏法を学びに入宋（唐）する話であるが、その途中で纒纒の城、食人国にまぎれこむところがある。いわば卷三十一の異境に相当する場所である。ただし右の天竺部の話と違って、自分の意志でその城や国に入ったわけではない。

本朝世俗部の卷二十六第七・八話に、猿神を退治して生贄の悪習を止めさせる話を載せる。この中の第八「飛彈国猿神、止生贄語」は、仏道修行の僧が飛彈ひなの国（岐阜県）の山奥の土地——日本国とは異なる世界——に迷い込み、その土地の猿神を退治する。話末に「其人ハ此方ニ蜜ニ通フナレドモ、此方ノ人ハ行ク事無カナリ」とあるので、こちらの郷の人々は話の後もその異境の土地に行くことはなかったであろう。この話の場合、右の卷三十一の諸話と同じく、異境の土地にはこちらの郷からは積極的に行くことはなく、その土地の状況は異境の人々の話に基づく、こちらの人々の想像の範囲内にとどまっている。

四、卷三十一の異境関連話にみる限界性

視点を『今昔』の中の卷三十一の位置づけについて考えると、仏の世界、あるいは公の世界からもっとも遠い話を核に集めたといわれ（新大系『今昔物語集』五解説、森正人氏。他の方の諸論も同方向）、私も妥当とし、以前この問題について述べたことがある（『中古説話文学研究』四章の五「今昔物語集」卷三十一考）。

それにもかかわらず、第十一―十八話の異境関連話を検討すると、若く勇ましい人々は勇気を出して、大膽に異境の土地に出掛けようとするが、年配の人や分別のある僧、及び『今昔』作者は、若い人々の言動を批判し、止めようとする。ここにいう異境は、仏の世界、あるいは公の世界からは遠い世界、むしろ別世界を意味する。『今昔』作者は本の国、本の郷にいる。作者は卷三十一に仏、あるいは公の世界から遠い世界の話を集めようとしながら、結局は両者の世界に戻り、両者の世界から離れることができなかった。前述した第十一話「陸奥国安倍頼時、行胡国空返語」がその典型的な話である。安倍頼時の一族がせっかく未知の土地に渡りながら、天竺部卷五第一話のように、新天地を開拓し、国造りをする方向はとらず、本国に戻る。作者もそれを是認する。そこに作者の立場、考え方、言説の限界があるとみる。

先日、井上英明氏の『列島の古代文学』（風間書房）等の諸論に触れる機会があったが、その時「漂泊の文学」試論（「批評と創作」明星大学青梅校、日本文化学部共同研究論集第八輯、所収）の中の左の一文が目についた。

「古代から現代までをざっと見渡すと、日本人の「帰巢本能」は東アジアの他の民族に限って比べても、異常に強い。日本文学史においても、国外をあちこち転々として、みずから望んでその生涯を閉じた真の「さまよえるユダヤ人」ならぬ日本人なるものはほとんど存在しないと行ってよい。」

この発言は、大江定基や僧成尋が入宋して、彼の地で死んでいる例等があるので、すべて正しいとはいえないが、



卷三十一の異境話を問題にする時に参考になる。確かに『今昔』作者は、卷三十一で仏や公の世界から遠い話を集めようとした。その点に視点を置いたことは、総合的で大きな説話集の世界を作り上げようとしたことで、すばらしい構想であり、評価できる。しかし作者の立場や考え方、言説は、結局は仏や公の世界に戻り、離れることはできなかった。このことは、『今昔』になぜ日本固有の神の話を採用しなかったことも関わることになろう。

注、これまでの諸論文・解説をみると、「異境」と「異郷」語の使用例がある。例えば『日本昔話事典』や『日本民族大辞典』等は「異郷」語を使い、新大系「今昔」五（森正人氏）は「異境」語を使う。「酒泉郷」「本ノ郷」（卷三十一第十三話）や「移郷」（卷二十三第十三話）の語からすると「異郷」語の方がよいが、新大系五の解説（五三三ページ）の「既知の外国でもなく」「日本の朝廷の支配の及んでいない」「世界という意味に従って、ここでは「異境」語を使用した。なお『日本国語大辞典』は両語ともほぼ同意の文で説明する。